

英 知 通 信

発行
英 知 大 学
兵庫県尼崎市若王寺
2-18-1 (〒661)
TEL (06) 491-5083
編集
英 知 大 学 広 報 室

昭和62年4月15日

英 知 大 学

No.50

卒業式式番

試練に耐える知慧と勇氣を！

学 長 井 上 博 嗣



豊かさの中で

本日、ここに英知大学第二十一回卒業式を挙げるにあたり、私は諸先生がたとご父兄の皆さまがたと心を一つにして皆さんがたの前途に神の祝福の豊かにあれよかし、と祈りつつ、すがすがしい門出をお祝いさせて頂く事を無上のよろこびとするものであります。

皆さん、ご卒業おめでとうございませう。ふり返ってみますと、昭和四十年代の前半において、この世に生をお受けになった皆さんがたは、このかた二十年あまり物質的には極めて恵まれ、しかも平和な時代の中で成長され、教育の課程を滞りなく終えてついに今朝この栄えある卒業の日をお迎えになったわけでありませう。もとより人間の仕合わせは、決して物質的な豊かさだけにあるわけではない事は百も承知であります。

が、人間だれしもあまりにも豊かさの中につかっておきますと、恩恵そのものに対する感覚が麻痺されてしまふのが現実ではないでしょうか。

国民の何と八七・六％が中流意識を持っているという、これほど結構な国が世界中に果たしてどのくらいあるのだろうか、ふと問うてみたくなるのは決して私一人ではないでしょう。申すまでもなく、わが国における物質的、経済的な豊かさは、国民の勤勉と、たえざる努力がもたらした恩恵でありますから、それ自体は尊いものとして感謝して受けとめなくてはなりません。けれども、私たちはいつのまにか一つの幻想の中に生きてしまっていて、それが単なる幻想であるという事に気がつかないままに安穩として暮らしているのではないのでしょうか。

それは何かと申しますと、物質万能主義、すなわち、お金さえ出せば何でも手に入れる事ができる暮らしは、すばらしいというメンタリティを知らず知らずのうちに身につけてしまっているという事でありませう。あたかも私たち一人ひとりの生活空間の中に、どんなものでも自由にとりそなえる事のできるデパートのような世界が限りなく拡がっていて、ちよっと手を延ばしさえすれば欲しいものはたちまちにして自分のものとなり、そしてそれを手に入れると、自分のあいだは結構事足りる、といった安易な快適な生き方を身につけてしまっていて、別にふしぎと

も思わなくなってしまうのも思わなくなってしまうのです。

こんにちマイ・カーも生活必需品となり、冷・暖房のある暮らしは当然の事となり、海外旅行はもはややわいドリームではなくなってしまうのです。その結果、万が一それらのうちのひとつでさえも思い通りに獲得できなくなると、たちまちにして人は不快感を覚え、フラストレーションに陥ってしまうのであります。

国民の生活レベルがこんにちでは想像することさえできない程低く、働いても働いてもいっこうに暮らしが楽にならなかつた一昔前に比べてみますと、現在の物質的な豊かさのただ中で実に言い知れないほどの不安や絶望のどん底で、あえぎあえぎながら生きていく人が結構少なくないという事実は、いったい何を物語っているのでしょうか。あまりにも恵まれている事が人間にとって果してほんとうに仕合せなのかどうか疑ってみたくなるわけでありませう。

逆境を生きるには

そこで、今日この日から社会人として船出されてゆく皆さんがたに申し上げたいのです。

実社会における現実とは想像以上に厳しく、如何なる人の人生においても何らかの試練はつきものであるから、逆境を生きるための知慧と勇氣とを常に身につけておかななくてはならないという事です。身のまわりのすべてがスムーズにゆくときには、人はいきおい胸を張り、大手を振って人生を歩んでゆくようになりませう。かりそめにも人生行路が終始順境の中で、あたかもエスカレーターに乗ったような気持ちで歩み続けてゆけるものであるとするならば、そこからは何の知慧も生まれて来なけ

れば、人間としての成長もなく、自己についての真実に目覚めるといふ事もなく、むなしく終わってしまうがちなものです。

ある一人の青年は入社してこのかた幸運にもすばらしい上司に恵まれました。彼はその上司から愛と信頼を一身に受け、多くの仕事をまかされ、また将来のため多くの期待を寄せられておりました。

上司の祝福にこたえて彼はエネルギーを蓄え、着々と実績をおさめ、年とともに身分も地位も固めていたのです。けれども、その上司が急に過労で倒れ、ついに他界してしまいました。そして、その方とは全く異なったポリシーをもった人が組織の長となり、やがては組織全体を変えてしまったのです。すばらしい可能性の持主であった彼は、その能力にもかかわらず、もはや脚光を浴びない組織の片隅に置かれてしまいました。

この青年にとって実人生における試練が始まったのはまさにこのときでありました。彼はその日までの仕合わせが自分自身の能力だけではないかと、実はかつての上司をはじめ多くの人がどの厚意的な指導によるところの恩恵であったことを今更のようになんげと悟るようになりました。あらためて自分とは何であるかということをいやが応にも考えざるを得なくなった彼は、じつと自分の心を掘り下げ、真実な自己についての認識を深めていったのです。逆境の中においてこそ、彼はこれまでのように仕事についての知識だけではなくて、あらためて実人生についての知慧を学びとり、試練の中に生きてゆく勇氣を体得していったのであります。

やがて何年かが過ぎて、人びとは

以前の彼とは異なった人間的な魅力の輝きに気づき、彼の評価は高まっていたのであります。とかくするうちに、彼自身が人生における秘められた一つの真実が気がつき、思わず身振りしたのでした。万が一かつての上司のもとで自分が祝福を欲しいままにし、安定した路線をまるで大船に乗ったような気持ちで歩んでいたとするならば、いつかは全能感にかられ、あたかも自分がその組織全体を支えているかのような幻想に生きてしまっていて、鼻持ちならぬ高慢な人間になり、やがては皆から拒絶されて、社会的にも、心理的にも疎外されてしまうというみじめな敗北者になったのではないだろうかという事なのです。

皆さん、万が一自分自身の判断だけで何の障害もなくスムーズに人生行路を歩み続けてゆく事ができるとすれば、それはとりも直さず人間としての成長が止まってしまったのと同じ状態であると考えてよいのではないのでしょうか。何となれば如何なる人間の判断にせよ、おのずから限界があるからであります。

したがって人生が順境の連続だけであるとするならば、自分の判断の限界を超越する機会に一度も恵まれなかったという、結果的にはかえって不幸な事になるのではないのでしょうか。それとは逆に、逆境に遭遇してこそ始めて自分自身の能力が試され、これまでに気がつかないで秘められていた別な可能性があらたに引き出されてゆくのではないのでしょうか。

限界の中で生きる

皆さんがたご自身がすでに体験された事かと存じますが、職場のため、あるいは家庭のためにどれほど誠意をもって尽くしたといたしまして

も、自分を理解してくれる人よりも、自分を批判する人たちの方がはるかに多いという事が少なくありません。そのようなときには、いやという程自分自身の持っている限界を痛感させられます。けれども限界をもつてはならないのです。その時こそ人は始めて本来の自己の姿の認識に目覚めるのではないのでしょうか。

また職場にせよ、あるいは結婚生活においてにせよ、自分が望んでいる事が一〇〇%思い通りになる事はまずないといっても過言ではあります。仮りせめにも自分の願望が一〇〇%実現したとするならば、その仕合わせは身のまわりの人たちがあるいは配偶者のかくされた犠牲の上に築かれた虚構の仕合わせにしか過ぎないものであるという事を考える心の余裕を持つべきではないでしょうか。自分の思っている事の半分どころか、あるいは三〇%、否、一〇%も実現しない時でさえも、じっと耐えて、静かに時を待つ事のできる人こそ、まことに英雄的な人なのであります。さまざまな限界の中で限界を意識しながら、しかもその限界を背負って生き、それでいて、その中からでさえも生きる意味を見出す事の出来る人こそほんとうの教養の持主なのであります。

実人生を生きているという事は生きる道のみならず一つ選ぶという事にほかなりません。職場での生活であり、結婚生活であれ、多くの可能性のうちからその一つを皆さんがたはお選びになるのです。そして、ひとたびその一つを選んでしまったら、そこから由来する結果を背負わなくては卑怯者と言われても仕方がないのです。

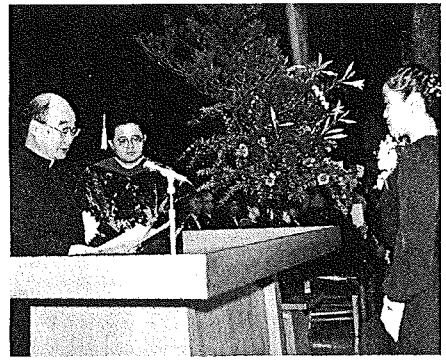
「こんな事になると始めからわかっていたら、私はも、別な道を選んだのに」と悔やんでみたところから、そこからは何一つ積極的なものが出て来る筈はないのである。人生の深い意味を悟る事ができるのは一つの選択をした結果がたとえ失敗であれ、悲劇的な結末であれ、それもまた自分の人生の不可欠な一部である事を謙虚に認めて、それを心よく引き受けて背負って行く時ではないのでしょうか。

パウロはローマ人にあてた手紙の第五章で自分自身の体験にもとづいて試験に耐えてゆく知恵を披露しております。「私は苦難さえ誇りにしています。苦難は忍耐を生み、忍耐は試験に磨かれた徳を生み、その徳は希望を生み出す事を知っているからです。」

この言葉を今、順序を変えて後から始めて始めの方へと読み直して解釈してみますと次のようになりまします。どうして人は希望しないで絶望するの。その訳は試験に磨かれていないから。何故そうかと申しますと、それに耐えてゆく根気強さ、すなわち忍耐がないから。それでは何故忍耐がないのか。それは苦難にある事をよしとしないからなのであります。苦難に耐えてゆく強さのある人へののみ希望があり、希望があるところにのみ人生が開かれてゆく事を確信し、本学の卒業生として誇りを持って、強く、たくましく生きてゆく事のできる仕合せな人になって下さい。そして神から与えられた生涯を神から呼ばれるその日まで精一杯生き抜き、パウロのように「よき戦いを戦い、走るべき道を走りつくして」生きるに値する一回限りの人生を有終の美でもって飾る事を心がまえとして、今日この日から社会人として力強く第一歩を踏み出される事を念願いたしました私の式辞とさせていただきます。

希望に輝き、新しい船出

昭和六十一年度卒業式



夜来の小雨もやみ、午前十時から本学講堂で第二十一回卒業証書授与式が挙行され、神学科五名、英語英文学科一四〇名、西語西文学科二七名、仏語仏文学科三三名の計二〇五名が社会人として巣立っていった。式はまずメルオー教授の電子オルガンの前奏で始まり、井上学長から卒業生一人ひとりに卒業証書が授与された。学長式辞(別掲)のあと、来賓の同窓会代表中村順平氏より祝辞(別掲)が述べられた。

次いで在学生代表西川隆君からクラブ活動で熱心に指導を受けた事や、大学祭や体育祭で人々との出会いの喜びを教わった事について感謝の言葉が述べられた。卒業生代表納多正之君から本学の建学の精神を通して、また恩師や友人、後輩との出合の中で、英知と誠の人間の生き方を学んだ事を感謝すると共に、今後本学で学んだ精神をこれからの社会人としての生活の中に生かしていきたいとの力強い決意が述べられた。

式終了後、クラス別の記念撮影があり、振り袖姿の華やかさの中で卒業生はクラブの後輩から花束を受け祝福され、別れを惜しみながら、それぞれ新たな希望に燃え、力強く巣立っていった。この日の午後四時からホテル日航大阪で全学科合同の謝恩会が開かれた。

なお、本年度の受賞者は次の通りである。

- | | |
|-------------|---------|
| 神学科 | 洪 英慈 |
| 英語英文学科 | 納多 正之 |
| 同右 | 平尾 純子 |
| 同右 | 北村 美和 |
| 西語西文学科 | 前田 紀子 |
| 仏語仏文学科 | 森田 真弓 |
| カトリック大阪大司教賞 | 伊東 恵 |
| 神学科 | 淳心会管区長賞 |
| 神学科 | 蒼石 一浩 |
| イスパニア大使賞 | 山野 正雄 |
| (西語西文学科) | 宮田 明子 |
| | 吉村 伊織 |

同窓会代表祝辞

副会長 中村 順平

卒業生の皆様、本日はおめでとうございます。ご父兄の皆様には、素晴らしい成長されたご子弟の晴れやかな姿を拝見され、この上もなく喜びの事とお心よりお祝い申し上げます。本日のおめでたい卒業式に際しまして、同窓会を代表し、一言お祝いの言葉を申し上げます。

皆様は、十有余年にわたる多年の勉学の功がなり、ここに大学四年の課程を終えられ、栄ある卒業証書を

手にされました。思えば随分と長い学窓生活であった事でしよう。小学・中学・高校・大学と経て、いよいよ本日最終の目的を果たされ、ここに大学を卒業するという事は、全学生生活の終了を意味するものであり、皆様の生涯にとって、一つの重要な時期をかくする記念の日でもあるに違いないのです。

しかし、それは単に皆様が過去十数年の課業の完成を記念するというよりも、むしろこれからの新たなる生涯の事業の開始を祝するものなればならぬとも考えるのです。

今、ようやく準備と修学の時代を終え、いよいよ皆様の事業と活動に門出せんとしているのです。皆様がそれぞれ選びとる仕事は多種多様であらうと思いますが、我々の勤労は単なる生活のために、あるいは快楽と幸福を満足させるだけのものではありません。それは、人間が自由の人柄として社会組織に参加した後、自己自身に対する高い義務が残されているという事です。

これから皆様をとりかこむ社会の虚偽と不正との戦いにおいて、一層深刻なる苦悩、時には失望すら経験する事もあらうかと思えます。

また、たとえ華やかな社会活動と世間的成功の絶頂にあっても、いかんともしがたい精神の孤独を経験することもあるでしょう。

しかし、それは人間を神と対決せしめ、永遠の生命と未知の幸福に向っておのれを高める階梯ともなるものであります。皆様のよう高い教養と学問を身につけ、いったん真理にめざめた者にとって、自らの内なる真理の声を消してはならないのであります。

このように、個人として自己の完成への努力が大学卒業者としての新しい自覚である事を強調したいと思

うのであります。ま、日常生活に処する良識と、世界を見る正しい目を持つ事が要求されている皆様には、是非判断力の正しい、実行力のある人物になって頂きたいと思えます。皆様の母校であり、心のふるさとである本学を愛し、母校がほころぶような人物になって頂きたいのです。なお、今後皆様には常に母校並びに同窓会と親密な連絡を保って下さい。

素晴しき大学生活の思い出

種 本 浩 美

(昭和六十一年度英語文学科卒業生)



六十年三月四日、すさまじい吹雪の中、私は今にも落ちそうなプロペラ飛行機でデュービュークに到着した。大寒波を思わせる猛吹雪が、長旅の疲れ、英語に対する不安、そしてお世辞にもおもしろいとは言えない機内食に対する不満さえも完全に吹き飛ばした。しかし目的の地のレストランに到着し、数人のアメリカ人学生を紹介された時、私のアメリカ人に対する甘い憧れは音をたてて崩れてしまった。

私を取り囲む彼らの英語がさっぱりわからないのである。「とんでもない所に来ってしまった。」私はただひたすら自分の勉強不足と、それにかかわらずアメリカにやって来た

る事をお願い致します。我々は母校を中心にして永久に親密な交わりを続け、お互いに協力、べんたつしたいものであります。本日の光栄あるご卒業を祝し、皆様一人ひとりのご健康とご多幸を心からお祈り致しますとともに、将来のご発展をお祈りし、私のご挨拶とさせて頂きます。有難うございました。

その無謀さに呆れるばかりであった。しかし一週間ほど過ぎ徐々に生活にも慣れてくると、この不安も僅かな期待と混ざり合い私の心を新鮮にしてくれた。それは大学に入学生した時のあの期待と不安に似たものがあった。

まだ肌寒い四月、高校生の面影を残したまま、私は英知大学に入学した。大学に来てはみたものの何等目的の定まっていなかった私は、受験勉強から解放されたという事もあり、ただただ毎日を楽しむことのみであった。皆さん、よく言われる事だが、英知大学のこじんまりとしたなごやかな雰囲気、先生方と生徒達の結び付きなど、他大学になんといよきを気づかずにいた私は本当に勿体ない事をしたものだと思ふ。

そんな私も二回生の終わり頃から自分の将来に対し不安を覚え、大学四年間で何かを身につけねばと思ふ、海外留学を考え始めた。当時毎年三月に行われていた研修旅行に参加しようと考えていたのだが、同じ行くなら長期留学をと思直し、約十カ月滞在することにした。

友人　これは誰一人として私の留学計画を信じていなかったが、当の私は自分でも信じられないくらい本気で「英語を話せるようになること。」「異国の文化を吸収すること。」「広い視野に立つてものを見る目を養うこと。」「が留学に際しての三大目標であった。

留学を決心した私にとって非常にラッキーであったことは、学内に国際交流委員会という留学の一切を取り扱う機関があり、私のような若輩者をも受け入れて下さるその制度にあった。英語を全く話すことが出来ないくせにアメリカに行くなど無謀な事のように思えたが、委員会の諸先生方は快く(?)私の申し出をお受け下さった。

さて「ロウラス大学での日々は本当に素晴しかった。」と書けば一行で終ってしまうこの経験も、たどたどしい思い出となるまでには、それなりの困難が伴う海外生活であった事は容易に想像がつくと思う。しかし私が恵まれていた唯一の事は良い友人と出会えた、ということである。

私が感じた最も効果的な英会話上達法は友人を作り、とにかくしゃべることにつぎると思う。そんな友人達と何の遠慮もなく付き合えるようになれば、もうしめたものである。相手が私の英語は下手だとわかってくれば、こちらも聞き直して何等恥じることもなく Broken English をしゃべることが出来る。これにビールでも入ればもう恐いものなしである。しかし緊張を解きほぐすためのビールも時として度を過ぎ、アメリカ人をして「Crazy Japanese」と言わしめた事もあるが、これなど単に英語を体得したいと考えている我々日本人にとっては、はなはだ迷惑な勘違いである。

十カ月程の滞在であったが、今では異文化を知る楽しさが見えてきた事に喜びを感じている。留学中、旅行にも出かけたりしたが、下手くそな英語を駆使してアメリカを駆け回る私を、当時改装中の自由の女神も歓迎してくれていたのではないかと思っている。留学に関しては、隔週休二日制で臨戦態勢を整える国際交流委員会が皆様に門戸開放中である。ぜひ一度その門をたたいてみられる事をお勧めする。

そんなこんなで留学を境に私の身辺も慌ただしくなってきたなと思っているともう四年生である。英知大学は文学部が基盤のためもあり、就職に関してはいささか苦戦を強いられる事は否めない。

特に昨今の円高不況のあたりをうけてか、昨年の就職戦線は激戦を極める結果となり、例にもれず私もその渦中に巻き込まれてしまった。しかし早めに就職活動を始めたせいもあってか、幸いにも第一希望の会社から内定を頂きはっとしているところである。就職の事に関してもそうであるが、私の具にもつかないような質問や相談に対してでも、叱咤激励して下さい、適確な指針を与えていただいた先生方には感謝の気持ちで一杯である。

以上思いつくままに大学生活を振り返って見た訳だが、ここまで私が曲がりなりにもやってこられたのは自分一人だけの力ではなく、回りの人達の力添えがあったからこそだと思っている。諸先生方をはじめ、いろんな事で刺激し合ってきた友人、そして私の留学などにも前向きに協力してくれた両親に本当に感謝している。蛇足ではあるが、今回アメリカからやって来たメアリーさんを我が家であずからせていただくとい

(四頁五段へ続く)

メアリーさんを囲んで

国際交流委員会では、昨年の十二月よりアシスタント教員としてアメリカの姉妹校、ローラス大学の卒業生、メアリー・スー・ベッセンさん (Mary Sue Bechen) をお迎えしている。彼女には、事務局において学生の英会話の相手をしていただいている。

月曜日から金曜日まで午前十時半から午後四時までなら、いつでも、誰でも気軽に彼女と英会話ができるというこの企画は大変好評で、訪ねて来る学生も日に二十名を下らない。それも英語英文学科の学生のみならず、仏語仏文学科、西語西文学科の学生もいる。

メアリーさんのお人柄のせいか全く気の張らない雰囲気、学生達も「ハイノメアリー」と、気軽に挨拶をして入って来る。「英会話」と気負いたって話をするのではなく、「ちょっと前を通ったので話していい」という感じだ。

最初は、おそろおそろ入ってきた学生でも、ひとたびメアリーさんと言葉をおかわすと、緊張がほぐれ、一時間も二時間も話し込んで帰って行く。そして次からはもっと気軽にやってくる。そうやってメアリーさんも、英会話の先生というより、学生のおよき友人であり、お姉さんのような存在になりつつある。

現在、メアリーさんは、学生のお家にホームステイしながら日本での生活を楽しんでおられる。お正月には振り袖を着たり、学生達と色々な所に出掛けたりして毎日すこぶる多忙だ。快活なアメリカの女性らしく、この間も阪神電鉄を利用して尼崎駅からバスで大学まで通って来られたということを知り、彼女のバイ

タリティーに一同感心せずにはおられなかった。

また、先日彼女の発案で、みずからが主催のアメリカン・パーティーを開いた。その日は後期試験の最終日というのに、二十名以上の学生が集まり、彼女の手づくりのピザに舌鼓を打ち、学生同志も打ち合わせ、語り合い、なごやかに楽しく終ったそのパーティーは大成功であった。これを機にまたひとつ学生達と「メアリーさん」との結び付きが強くなったようである。

この春休みに、メアリーさんの英会話教室が開かれることになり、希望者を募ったところ、なんと六十名もの学生が殺到した。これにはメアリーさんも国際交流委員会もうれい悲鳴をあげた。このように国際交流委員会もメアリーさんの来日と共にますます活気を増している。

(国際交流委員会 楠川知子 記)



入学試験結果

昭和六十二年度

昭和六十二年度の入学試験は推薦入試を十一月二十五・二十六日に、一般入試については、一次を二月十二日、二次を三月十二日に行ない、試験結果は別表の通りで、最終的に英語英文学科百五十四名・西語西文学科五十五名、仏語仏文学科五十五名、神学科六名および編入学者四名を含めて計二百七十四名が入学しました。

昭和 62 年度 入学試験 状況

倍率：受験者/合格者数 () 内 女子内数

| 募集人員 | 志願者 | | | 受験者 | | | 合格者 | | | 倍率 | | | | | | |
|--------------------|-----|----------|-----------|----------|-------------|----------|-----------|----------|-------------|----------|----------|---------|-----------|-----|-----|-----|
| | 推薦 | 一般1 | 一般2 | 推薦 | 一般1 | 一般2 | 推薦 | 一般1 | 一般2 | 推薦 | 一般1 | 一般2 | | | | |
| 英語英文学科 | 150 | 201 (54) | 415 (132) | 179 (64) | 795 (250) | 198 (54) | 362 (104) | 167 (59) | 727 (217) | 76 (30) | 94 (38) | 36 (18) | 206 (86) | 2.6 | 3.9 | 4.6 |
| イスパニア語 イスパニア文学科 | 50 | 50 (18) | 135 (28) | 71 (9) | 256 (55) | 50 (18) | 126 (24) | 69 (9) | 245 (51) | 27 (14) | 28 (11) | 8 (3) | 63 (28) | 1.9 | 4.5 | 8.6 |
| フランス語 フランス文学科 | 50 | 42 (10) | 114 (32) | 65 (12) | 221 (54) | 42 (10) | 100 (22) | 61 (11) | 203 (43) | 25 (9) | 30 (13) | 13 (6) | 68 (28) | 1.7 | 3.3 | 4.7 |
| 神 学 科 | 10 | 5 (1) | 3 (0) | 1 (1) | 9 (2) | 5 (1) | 3 (0) | 1 (1) | 9 (2) | 5 (1) | 3 (0) | 1 (1) | 9 (2) | 1.0 | 1.0 | 1.0 |
| 合 計 | 260 | 298 (83) | 667 (192) | 316 (86) | 1,281 (361) | 295 (83) | 591 (150) | 298 (80) | 1,184 (313) | 133 (54) | 155 (62) | 58 (28) | 346 (144) | | | |

人 事

本年度は例年になく志願者がふえ、一般一次の倍率は英語英文学科で三・九倍、西語西文学科四・五倍、仏語仏文学科三・三倍となりました。(教務課長 幸田健造 記)

専任教員

退任 (三月三十一日付)
教授 (英語英文学科)

佐伯わか子

教授 (教養課程)

西山 俊彦

助教授 (英語英文学科)

芝垣 哲夫

講師 (教養課程)

小野 敏子

新任 (四月一日付)
教授 (英語英文学科)

山内 邦臣

教授 (仏語仏文学科)

福島 重一

教授 (教養課程)

加藤智満子

助教授 (教養課程)

フランシスコ・オガンド

講師 (西語西文学科)

岡田 彰子

講師 (教養課程)

ホセ・レクンベリ

昇 格

三竹 洋一

助教授 (仏語仏文学科)

西井 克泰

休職 (西語西文学科)

石野 好一

非常勤講師 (新任)

マリアノ・ベニエラ

く好機を得、両親とも非常に和やかに打ち解け、私も英語の勉強が出来、大変満足している。ただし彼女には超軽量小型寝具と典型的和風瓦小屋とによって相当のカルチャー・ショックを与えてしまった事を、この場をかりて深くお詫言しておく。そして後輩の皆様の下に素晴らしい大学生活が訪れますように。

労務職員

退任 白井 澄子

新任 中橋嘉代子

研究室だより

英知大学論叢『サビエンチア』第二十一号掲載の研究論文

西山俊彦教授

基本的人權と人間本性—理念史と事実史への予備考察—

ガイセンテ・アリバス O.P. 講師
Horizonte Filosófico del Problema de Dios en X Zubiri (I)

三浦太郎講師

初期イスラーム布教者に関する予備的考察—13〜16世紀のスル—

社会をめぐって—

中野正勝助教授

H. Mühlen の三位一体論についての批判的考察 (I)

井上博嗣教授

Henry Thoreau の労働観

J.L. Alvarez-Taladriz 教授

El Problema de Ocularse o Manifestarse en Tiempo de Persecucion

蔵本邦夫講師

“La fuerza de la sangre” 研究

平山篤子講師

フライ・ドミンゴ・デ・サラサー

ルとシナ問題への意見 (2)

J.S. Alvarez-Taladriz 講師

イスパニア音楽の特徴—ホタに